

「土壌断面調査から読み解く土づくり」

中国四国土を考える会／山口市認定農業者の会 合同研修会

▶2月22、23日
(山口県山口市)

トウモロコシ跡地と 水田で土壌調査

一昨年より中国四国土を考える会が企画してきた「土中環境はモノリスで見えて知る」。今回の第4弾は山口市認定農業者の会に呼びかけて開催された。講師は農業環境変動研究センターの前島勇治氏。圃場2カ所で土壌断面モノリスを採取、それを解説した。参加者は認定農業者の会の会員で子実トウモロコシづくりに取り組んできた山口市内のメンバー、そして土を考える会会員および市行政や農研センターの研究者、スガノ農機(株)の社長&スタッフなどだった。



初日に実施されたのはトウモロコシ跡地での土壌断面調査。二期しか栽培していない圃場だが、プラウ深耕後、表層25cmまで有機質に反応した黒い作土層が形成されていた。2日目には水田土壌調査。こちらは沖積地で、水はけのよい下層砂壤土の上に15cmくらいの作土が形成されていた。そ

の下には鉄分を含む耕盤層があるものの、減水深が2〜3cm以上あるという理想的な状態の水田土壌だ。「ここでは暗渠を入れる必要もなく

水稲が生産できる。調査圃場の隣では畦立てした麦づくりが行なわれていたが、畦立てなど必要のない場所だ。今後、水稲以外の何を植えるかによって作業体系を考えるべきだろう」(講師の前島氏)

子実トウモロコシの 生産者も参加

今回のイベントで特筆すべきは、テーマの「土」とどまらず、子実トウモロコシ生産を含む「山口市での『食と農』戦略の現状」と題したシンポジウムが行なわれたことだ。

山口市ではアドバイザーを務める浅川芳裕氏のリードにより、4年前から「地産地商」に取り組んでいる。これまで地元産野菜のほとんどは、県外に出荷されてきた。上場した養鶏中心の畜産農場である(株)秋川牧園を含めて養鶏・酪農・肉牛などの畜産農家がかなりいるものの、飼料はすべて輸入されている。その需要量は極めて大きい。市内のコメ消費量の数倍にも上る。実は山口市で最も需要の大きな農産物はトウモロコシなのだ。

一方、同市内には多数の集落営農

が存在するが、ご多分に漏れず高齢化によって未来が危ぶまれている。そんななかでの地産地商でありトウモロコシ生産だった。

浅川氏らは地元スーパードも巻き込み、道の駅に野菜を持ち込めば市内各所の直売所やスーパード店舗に野菜が配送される仕組みがすでに構築されている。注文調整については、地元スーパードと農家の間でLINEを使った連絡網もでき上がっている。

これによって、野菜農家の収益が飛躍的に上がり、新たな作物もつくられるようになった。トウモロコシ生産に取り組むメンバーによる加工バレイシヨの契約栽培も今年から始まる。

シンポジウムでは、浅川氏とともに市役所側でバックアップした安村崇氏、市内スーパードのマネージャーである河野悌司氏、2017年の栽培実験からトウモロコシ生産を始め、山根正之氏、野菜とトウモロコシ生産に取り組む中戸茂盛氏による報告会が行なわれた。

イベントの最後は、中国四国土を考える会の2019年度総会。先に行なわれた全国土を考える会の活動休止報告とともに、提起された議題がすべて了承された。また、山根氏(前出)が新規会員として加入した。

(昆吉則)